Carson McCullers のテーマ
——愛と孤独の追求——

小 林 浩 子

カーソン・マッカラーズ (Carson McCullers 1917—1967) は，キャサリン・アンポーター (Katherine Anne Porter 1894—)，ユードラ・ウェルティ (Eudora Welty 1909—)，フラネリー・オコナー (Flannery O'Connor 1925—1964) と共にアメリカ南部を代表する小説家である。彼女達に共通の特色として，作品数が比較的少ないということがあるが，マッカラーズの作品も長編が四編，短編が十編，その他戯曲と詩が少数である。その中でも *The Member of the Wedding*「結婚式のメンバー」(1946) と *The Heart is a Lonely Hunter*「心は孤独な狩人」(1940) が代表的作品とされている。

1940年代から現代にかけて活躍したマッカラーズの文学的テーマは，人間の孤独に対する追求である。歪んだ美意識とグロテスクとが結びついた中で追求される孤独——それは生の本質的なものであり，いくら他人外界との交わりを持ってもその場限りのものであり，元来人間は皆一人，皆孤独な生き物であるという。彼女は，この孤独という主題を明確化するために作品全体に流れるイメージ，あるいはその登場人物に独特の技巧を凝らしている。つまり，不具者や畸形者，白痴，黒人等を登場させることにより“報われぬ愛の世界”を表現している。もう一つの特徴としては，作品中に見受けられる音楽的感覚である。彼女自身，小さい頃からピアノの才に恵まれ音楽的環境の中で育ったことが多分に影響していると思われる。以上のようなことを考察しながら，*The Member of the Wedding* について述べてみたいと思う。

主人公のフランキー・アダムズ (Frankie Addams) は，思春期へ一歩足を踏み入れたばかりの12歳の少女である。大きく分けて三部から構成されるこの作品は，第一部では，フランキーと従弟のジョン・ヘンリー (John Henry) とベレニース (Berenice) という黒人の召使い女との間の会話が中心となっている。フランキーは，年中ショートズボン，ショートカットというボーイッシュな感じの少女で，一日の大半を薄汚い台所でトランプをしたり，食事に長い時間をかけたり，ベレニースの結婚遍歴に耳を傾け過ごす。それは長く，無意味でひどく退屈な毎日であった。さらにフランキーは若すぎるため，どこの少女クラブにも所属することができなかった。こうした事情が思春期の感受性の強い彼女に，焦りを覚えさせ，「このままの生活ではいけない，何とかしなくては……」という感情を抱かせていた。そんなある日突然，兄が結婚するという知らせを受け取ったことから，フランキーは自分も結婚式に出席し，さらに新婚旅行にも連れて行ってもらおうと秘そかに考え，これでやっと単調な生活から脱け出し，結婚式のメンバーになれるという期待で彼女の胸はふくれた。第二部へ入るとフランキーは，F・ジャスミン (F. Jasmine) という女の子らしい名前に変わる。結婚式に参列できるという感激が彼女を有頂天にさせるが，惨めな現実とぶつかり戸惑う。第三部，結婚式の当日，周囲の人々からは子供扱いされ新婚夫婦にも相手にしてもらえず，まして新婚旅行など一緒に連れて行ってもらえるはずもなかった。やがて式も終わり，彼女は一人とり残されたような孤独感に耐えきれず，その夜のうちに家出を試みるがあっけなく警官に補導されてしまう。数週間後，従弟のヘンリーが脳膜炎のため死亡し，ベレニースは結婚のため家を去り，ジャスミンは父と郊外の家へ移りそこで知り合った同年代の少女と仲良くなり再び別の夢——おそらく破れるであろう夢を追いかけて暮らすのである。この作品を貫いているテーマは，思春期の少女のとりとめのない夢想とそれから脱け出そうとする焦燥である。

McCuller's *The Member of the Wedding* places her in the first rank of young American writers. She combines fantasy, humor and acute psychological analysis in this study of a child moving into adolescence, and her style is both fresh and charming.(1)

この作品には，不具者あるいは畸形者は直接登場していないが，マッカラーズの主張する“報われぬ世界”がある。フランキーは，年齢のわりに長身で，自分が将来このまま背が伸び続け畸形になるのではないかと秘そかに心配している。

She stood before the mirror and she was afraid. It was the summer of fear, for Frankie, and there was one fear that could be figured in arithmetic with paper and a pencil at the table. This August she was twelve and five-sixths years old. She was five feet five and three--quarter inches tall, and she wore a number seven shoe. In the past year she had grown four inches, or at least that was what she judged. (中略) Therefore, according to mathematics and unless she could somehow stop herself, she would grow to be over nine feet tall. And what would be a lady who is over nine feet high? She would be a Freak.(2)

さらに大人の世界へ足を踏み入れたもののまだ心のどこかで子供の世界を脱っしきれない不安定な心理が見事に表現されており，これはすなわち人間の精神の不安定さを示すが，それが最も端的にあらわれる思春期に託して描写している。

Frankie stood looking into the sky. For when the old

question came to her — the who she was and what she would be in the world, and why she was standing there that minute — when the old question came to her, she did not feel hurt and unanswered. At last she knew just who she was and understood where she was going. She loved her brother and the bride and she was a member of the wedding. The three of them would go into the world and they would always be together. And finally, after the scared spring and the crazy summer, she was no more afraid.(3)

マッカラーズは，こうした思春期に訪れる危機や子供から大人への成長は，除々に行なわれる必要はなく，ある時期の激しい危機の中に要約することができると考えていた。大人と子供の間に不安定な精神状態のまま放り出されていたフランキーは，兄の結婚式の前夜，遂にその壁を破り，孤独な子供時代に別れを告げる。つまり酔っ払った兵士との逢引き，その果てには水差しで兵士を殴り，どうにもいたたまれない気持ちに陥る自分を発見する。期待はずれの結婚式，家出，そして新しく生まれ変わるフランキー，イタリア美術に心惹かれ学校の新しい女友達のことを語るフランキー……12歳という年頃における再起能力のすばやさを描写している。

処女作にあたる *The Heart is a Lonely Hunter* が発表されたのは，マッカラーズが22歳の時であった。この作品も“孤独”をテーマとし，さらに人間愛，人種問題等を取りあげている。

McCullers is surely the first white Southerner to deal with Negroes easily and with justice.(4)

この作品でマッカラーズは“孤独”すなわち“満たされぬ愛，求め合

う愛”を二人の唖の関係に託して描写している。

アントナープロス (Antonapoulos) は薄気味の悪い半馬鹿で，主人公のこれもまた唖のシンガー (Singer) の愛情に反応できない。しかしシンガーはそんな彼に惜しみない愛情を注ぐ。

> **Antonapoulos! Within Singer there was always the memory of his friend. At night when he closed his eyes the Greek's face was there in the darkness — round and oily, with a wise and gentle smile. In his dreams they were always together.(5)**

また彼は“沈黙”であるが故に，周囲の人々から賞賛のこもった関心を集める。自分の子供達が，無気力な黒人の仲間入りをしてしまったことを嘆く医師のコープランド (Copeland)，人生に対して絶望しかけている共産主義者のジェイク(Jake)，大人の仲間入りをしたがっている思春期のミック・ケリー (Mick Kelly)——彼らはすべてシンガーの慰めを必要としていた。一方シンガーは，周囲の人々から感じる愛情とか信頼といった重荷を一人では背負いきれず，そのはけ口としてあまり人間的価値があるとは思われないアントナープロスへ異常なまでの執着を覚える。それ故のシンガーの自殺。

The Heart is a Lonely Hunter というタイトルの示す通り，登場人物はそれぞれのおかれた環境に適合することができず，失望し疎外感を抱くようになる。そのはけ口として自分を愛し，信頼してくれる第三者を求めるいわば狩人となる。しかしこの狩人達は，獲物を捉まえることのできない，すなわち魂が救われることのない孤独な存在である。

酒場の主人ビフ (Biff)，マルキストのジェイク，医師のコープランドそしてミックはそれぞれシンガーへ想いを寄せ，一方そのシンガーは，たった一人の相棒アントナープロスへ，またビフはミックへほのかな愛情を感じているが，もちろんミックは知らん顔。以上のようにすべての

愛が一方通行的に描かれ，これはマッカラーズの唱える愛すなわち孤独という考え方の表われに他ならない。人は孤独な状態から脱け出そうとして誰かを愛し，その行為により一時的に他人と共有関係を結び満足するが，それはすぐに消え去り，以前より一層つらい孤独感に襲われる。多感な少女ミック・ケリーの描写の所では，先に述べたフランキーを連想させるものがあり，それにもましてミックには作者自身の少女時代が反映されているようにも思える。次の文章は，シンガーの目を通して見たミックの描写である。

> The girl used to dress in short trousers like a boy but now she wears a blue skirt and a blouse. She is not yet a young lady. I like her to come and see me. She comes all the time now that I have a radio for them. She likes music. I wish I knew what it is she hears. She knows I am deaf but she thinks I know about music.(6)

さらにミックは，自分の生きている世界を "outer world" と "inner world" に区別している。

> she sat down on the steps and laid her head on her knees. She went into the inside room. With her it was like there was two places — the inside room and the outside room. School and the family and the things that happened every day were in the outside room. Mister Singer was in both rooms. Foreign countries and plans and music were in the inside room. The songs she thought about were there. And the symphony. When she was by herself in this inside room the music she had heard that night after the party would come back to her. (中略) The inside room was a very private place.(7)

これはすなわち現実と夢をそれぞれ別のものと考え，“outer world”では，彼女は努めて普通の女の子のように振る舞い，現実に根ざした生き方をしているが，“inner world”では作曲の練習をしながら将来コンサートピアニストになろうと秘そかに考えている。こういった現象はこの時期（思春期）の少女にはよくありがちなことかも知れないが，そうとばかりも言えない，つまりミックだけに限らず他の登場人物もそれぞれ“outer”と“inner”を心の中に持っているのではないだろうか。

マッカラーズはこの小説の背景となる時代と場所について次のように述べている。

> いつの時代，どこの場所で起こってもかまわない物語であるが，だいたい1930年代のアメリカ南部。町の名は定かではないが，アラバマ州に隣接したジョージア州西部で，チャタフーチ河べりの町，人口は約四万人，その三分の一が黒人である。典型的な工場町で商業地区は，紡績工場と小さな商店街を中心にかたまっている。労働者達は組織化されていず，無秩序，無気力なまま毎日の暮らしに明け暮れている。そして彼らは，貧困と失業の原因を探ることよりも，自分達よりさらに一段と低い所で虐げられている黒人を軽蔑している。(8)

この作品を発表した頃のマッカラーズは，南部人の心の孤独は苦悩と密接に結びつき，知り尽くすこともできないし，人に伝えることもできない罪の意識がその根底にあるということを友人に語っている。つまり彼女の作品全体のテーマとなっている“愛と孤独”の背後には，南部人としての罪と苦悩の意識が潜在しているのかも知れない。そして南部の外面的には産業主義にとらわれ，内面的には古い人種主義的な過去の歴史にすがりついている社会という根本的なものの上に，さらに特異な創

作上の技巧——怪奇的でグロテスクな形式——を織り交ぜ“愛”“孤独”“挫折”というそれぞれのモチーフが音楽的なつながりを持って作品全体に漂っている。

以上1920年代以後の“南部ルネッサンス”という用語のもとに代表される，アメリカ南部文学者の一人として，カーソン・マッカラーズの作品とその文学的特徴について述べてきたわけであるが，マッカラーズの描く世界は，読者にさまざまな愛の形を教えてくれると同時に，その愛につきまとう孤独の翳りを示唆している。そして我々は，知らず知らずのうちに彼女の作品が持つ南部の歴史，風土と結びついたはかり知れない審美的な世界に心惹かれるのである。

Notes

(1) Kiernan, Robert F.: *Katherine Anne Porter and Carson McCullers*, G. K. Hall & Co., Boston, Mass., 1976, pp.110.—112.

(2) McCullers, Carson: *The Member of the Wedding*, Penguin Books Ltd, 1946, p.25.

(3) Ibid., p.57.

(4) Kiernan, Robert F.: *Katherine Anne Porter and Carson McCullers*, G. K. Hall & Co., Boston, Mass., 1976, p.105.

(5) McCullers, Carson: *The Member of the Wedding*, Penguin Books Ltd, 1946, p.177.

(6) Ibid., p.190.

(7) Ibid., p.145.

(8) 河野一郎訳，「心は孤独な狩人」，新潮社，1972，p.455.